

ドイツにおける移民統合の実態——モスク建設過程の分析を中心に
**The Actual Situation of the Integration of Immigrants into German Society
:Through Analyzing the Accepting Process of Building a Mosque**

昔農 英明（日本学術振興会）

SEKINO Hideaki (The Japan Society for the Promotion of Science)

キーワード：モスク建設、統合政策、エスニック・コミュニティ

周知のように、ドイツでは 2004 年に移民法が成立し、連邦政府主導のもと移民の統合政策が行われるようになった。こうした政策方針転換の背景には、ドイツが直面する福祉国家を支える労働力の不足、とりわけ多数の高度人材を必要としているという経済的な理由があるだけではなく、移民が統合されていないという深刻な社会問題があるとされる（近藤 2007: Bundesregierung 2007）。特にドイツ社会の中で問題視されている移民集団は、宗教的にはイスラム系移民であり、エスニック的には、イスラム系移民集団のうちの大半を占めるトルコ系移民である。

連邦レベルの政治討論やマスメディアの報道のなかでしばしばとりあげられるように、こうした移民の中にはドイツ語能力の低い者が少なからずおり、移民は同郷人や出身国とのつながりを強化するために、ドイツ社会と接点を持たずに、エスニック・コミュニティの中で自閉的に生活しており、これがさらなるドイツ社会との分離をもたらすと批判された。これは、移民がドイツ社会のなかにその出身社会と結び付いた独自の社会空間を形成しているという「平行社会（Parallelgesellschaft）」として批判される問題であるが、エスニック・コミュニティの存在は、移民の受け入れ社会への統合の障害となるだけではなく、社会を分裂させる要因になると批判されたのである。

エスニック・コミュニティと「平行社会」との関係については、近年、政治家の発言、議会での討論、メディアの報道の中で論争点となっただけではなく、ドイツの学術界においても、長年にわたって重要な論点の一つとなっており、それは端的にいえば、エスニック・コミュニティの存在は、移民の統合を促進するのか、ないしは非統合につながりうるものであるのかをめぐる論争であった（Elwert 1982; Esser 1986, 2009）。

しかしながら、移民団体の存在、ないしはそうした団体が関わる行為が、ドイツ社会への統合に寄与するものとなるのか、あるいは統合への障害となるのかという二項対立的構図において把握することは、統合問題の実態分析にとって有益とは言い難い。実際には移民団体の活動の目的・中身はきわめて多様であると同時に、そうした活動は、時間の経過、団体の出身国とのつながり、ならびに受け入れ国の国家レベル、ローカルレベルにおける統合政策の方針の影響などといった多様なファクターが交錯することにより、多面的に規定されるからである（Pries und Sezgin 2010）。

本報告では、こうした政策言説ならびに学界での議論を踏まえたうえで、「平行社会」論にみられる受け入れ社会とエスニック・コミュニティとの関係を批判的に考察するために、近年地域の移民団体が関わるモスクの建設の実態と、それをめぐって生じる政治論争を考察・分析の事例として取り上げることにはしたい。

近年ドイツでは各所においてモスクの建設が急速に進んでいる。もとより、ドイツには従来から多くのモスクが存在していたが、その圧倒的多数は既存の建物を再利用するなどして設立されたものであり、一目でわかるような大規模なモスクはこれまで少数であった。だが、近年そうしたモスクの建設数がにわかに急増し、モスク建設論争は、ドイツ社会を揺さぶる政治的・社会的に主要な論争点として持ち上がってきている (Wohlrab-Sahr und Tezcan 2007; 近藤 2009)。

モスク建設の問題は、巷でセンセーショナルに議論されるようなキリスト教対イスラム教の対立という宗教的、文化的問題に還元されるものでは決してない。むしろこの問題は、受け入れ国家の視点からすれば、国家と宗教の分離がなされる世俗国家において、移民の文化的・宗教的な権利が公的領域においてどこまで認められるのかに関する対立・妥協・協調という問題である。このような問題の前提において、移民側の利害と、国家、さらには地域社会の固有の利害がどのように交錯しつつ、モスクの建設が実施されているのか。本報告では、(1) 移民団体固有の利害ならびに出身国との政治的な関係、(2) 連邦レベルにおける移民統合政策の基本指針、(3) 自治体ならびに地域社会の統合にかかる利害、政策指針の主に 3 つの側面に注視しつつ、一地方都市のモスク建設に関する論争、建設過程の具体的事例を挙げて、2000 年代以降における移民統合の実態の一端を明らかにすることにはしたい。

引用文献

- Bundesregierung, 2007, *Der Nationale Integrationsplan: Neue Wege- Neue Chancen*, Baden-Baden: Koelblin-Fortuna-Druck.
- Elwert, Georg, 1982, „Probleme der Ausländerintegration. Gesellschaftliche Integration durch Binnenintegration,“ *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 34.
- Esser, Hartmut, 1986, „Ethnische Kolonien: Binnenintegration oder gesellschaftliche Isolation,“ Hoffmeyer-Zlotnik (Hg.) *Segregation und Integration. Die Situation von Arbeitsmigranten im Aufnahmeland*, Mannheim: Forschung, Raum und Gesellschaft.
- , 2009, „Pluralisierung oder Assimilation? Effekte der multiplen Inklusion auf die Integration von Migranten,“ *Zeitschrift für Soziologie*, 38(5).
- 近藤潤三、2007、『移民国家としてのドイツ』木鐸社。
- 、2009、「現代ドイツのモスク建設をめぐる紛争——ケルンにおける政治過程」『社会科学論集』47。
- Pries, Ludger und Sezgin, Zeynep (Hg.), 2010, *Jenseits von "Identität oder Integration": Grenzen überspannende Migrantorganisationen*, Wiesbaden: Verlag für Sozialwissenschaft.
- Wohlrab-Sahr, Monika und Levent Tezcan (Hg.), 2007, *Konfliktfeld Islam in Europa*, Baden-Baden: Nomos.